平成25年1月19日

平成24年度連載講座

～古代山城　屋嶋城跡から歴史と地域を考える～

第3回 屋嶋北嶺を歩く

案内者　　屋嶋城跡研究所　平岡岩夫

資　料

①古代山城の分布図

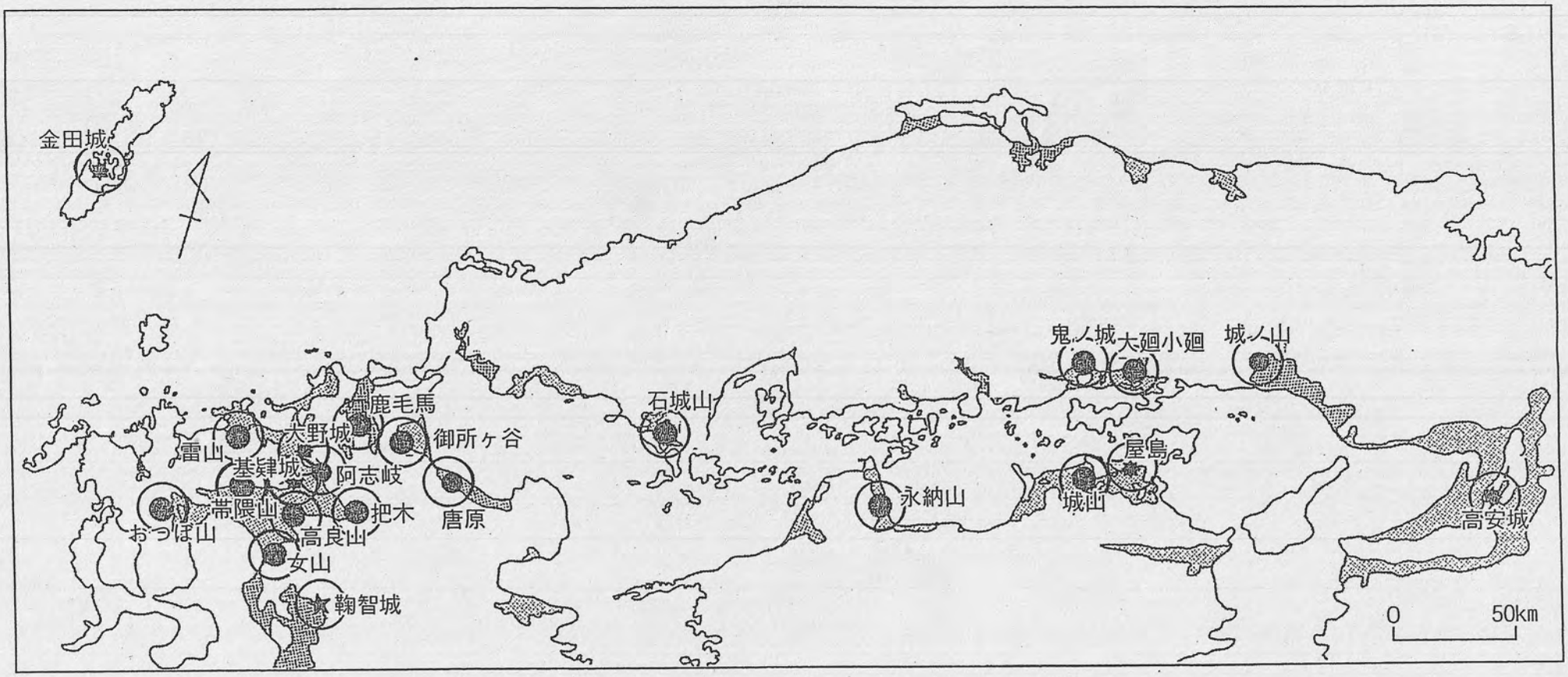
②浦生地区調査報告書（抜粋）資料

遺構平面図・城壁断面図・出土遺物

③屋嶋城跡の浦生の石塁に思う

主催　高松市教育委員会　文化財課

岡山市教育委員会　乗岡　実氏提供＊



古代山城の分布図　　（海岸線は古代の推定線・アミは海岸平野・円は半径11kmの地域圏）

＊村上幸雄・乗岡　実　著『鬼ノ城と大廻り小廻り』吉備人出版

＊乗岡　実「地域勢力と古代山城」『古代文化62巻 2号』古代学協会

史跡天然記念物屋島－屋嶋城跡浦生地区－

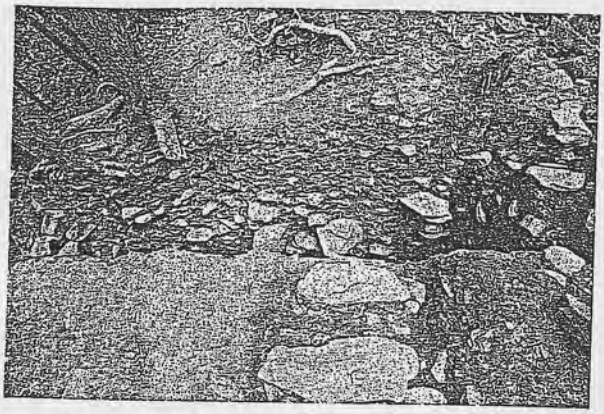
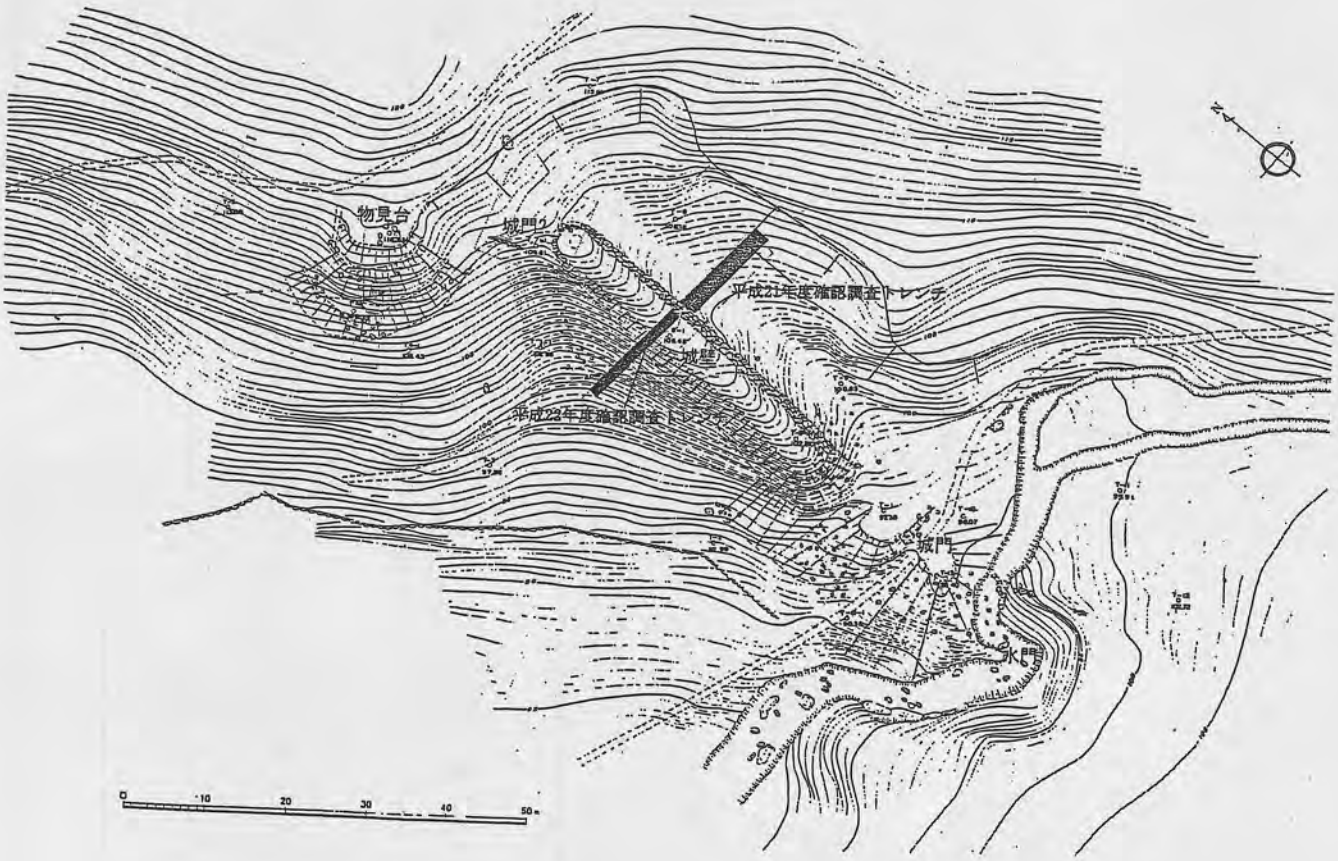
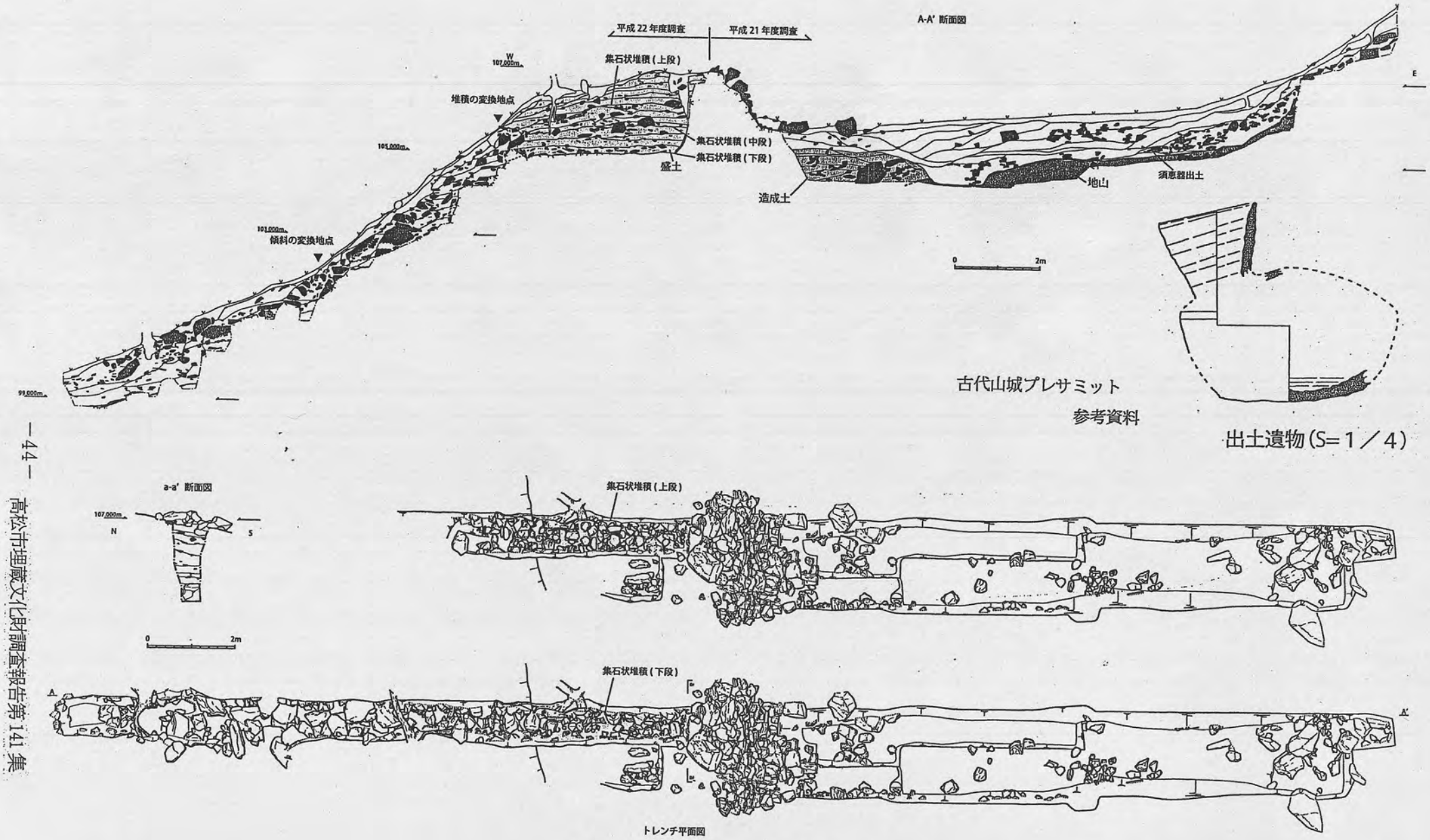


写真13　城壁天端堆積状況（南方向から）

写真14　外法面トレンチ掘削状況（西方向から）



第44図　トレンチ平面配置図



第45図　トレンチ平・断面図（1／120）

～屋嶋城跡の浦生の石塁に思う～*

屋嶋城跡研究所　平岡岩夫

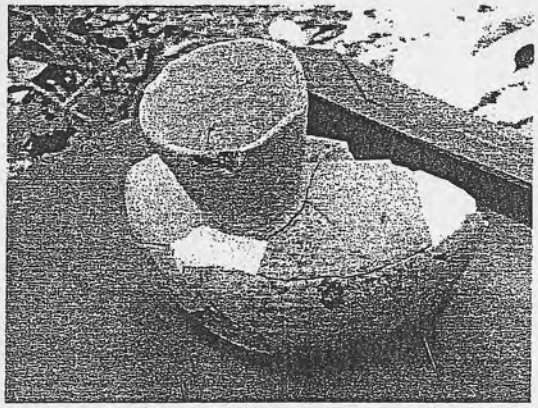
はじめに

日本書紀に667年に築城したと記述された屋嶋城は、白村江の戦い(663年)の大敗の後に、国を守るために中大兄皇子が築かせた飛鳥時代の山城で、文献と考古資料が合致した四国で最古の史跡です。しかし、このことが実証されたのは、南嶺山上の西南斜面で城門跡が発掘された平成14年のことです。山上の城は、南嶺と北嶺の山上全域が城跡であると公表されています。しかし、南嶺城跡説を唱える研究者もいます。

この屋嶋城跡は、文化庁も注視する重要史跡で「屋嶋城跡調査整備検討委員会」が設置され、慎重に事業が推進されています。高松市は、2015年度の城門跡の一般公開を目指して整備中です。

1．浦生の石塁の実証

平成22年の春、浦生の石塁の城内で築城年代の土器が発掘されたと報道されました。本当か！この遺構は未確定の遺構でしたので、にわかに信じがたい心の高揚がありました。このたびの須恵器の出土によって、この遺構も屋嶋城跡であることが確定したと思われます。この状況に至るまでに90年強の年月を要して、いろいろと紆余曲折がありました。



築城年代の土器を発掘

2．発見からの経緯

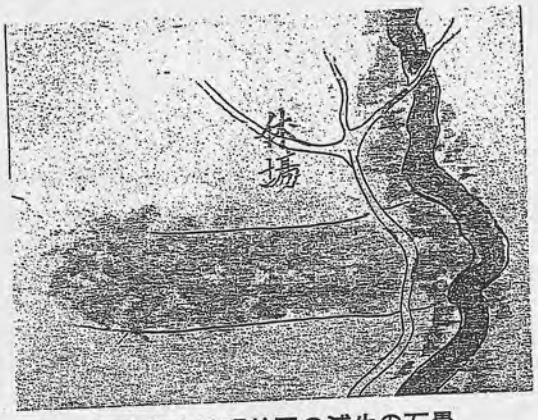
浦生の石塁は、大正 6年に東京帝国大学の関野貞教授が発見された屋嶋城跡で、学界誌には「断崖のところは城壁を省略するものの南嶺と北嶺を城内に取り込み、浦生の谷を包括する山城である」と発表されています。遺跡の存在は史学雑誌・建築雑誌に発表された関野論文が初見となります。しかし、県内の出版物での関野論文の紹介は、平成15年の調査報告書まで待たねばなりません。

発見された時代は山上を取り囲む列石遺構に関して、霊地を取り囲む境界石で「神籠石」と呼称した「霊域説」と、山城跡であると判断した「山城説」に意見がわかれました。歴史地理学・考古学の学史に残る「神籠石論争」になりました。論争の結論は時期尚早であるとの理由で休止されましたが、大正～昭和時代の文化財の指定名称には「神

籠石」が採用されています。

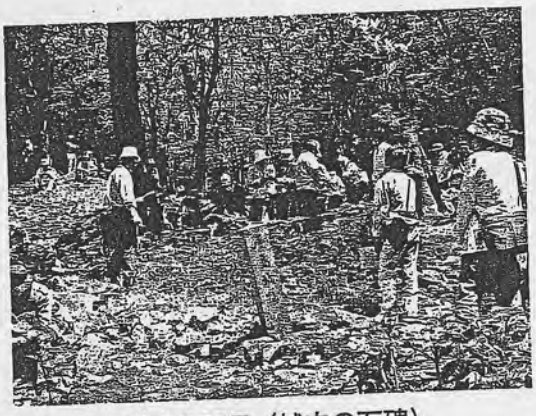
関野教授が屋島を探索した時に、讃岐の人々は城跡遺構の存在を知りませんでした。しかし、明治初期の「浦生洛中地理絵図」には、浦生の石塁の絵が描かれています。城に関した文言はなく「休場」と記述されています。城の事柄は時の流れとともに風化した様子ですが、この時代の浦生の人々は巨大な構築物の存在を知っていたのです。

大正11年の香川県の調査報告書では、遺構の概略図とともに浦生の石塁は屋嶋城跡として報告されています。そして、この調査報告書の中に、坂出市の城山の山上遺構も城跡であると報告されています。



浦生洛中地理絵図の浦生の石塁

昭和 9年に屋島が国の「史跡天然記念物」に指定されました。指定理由の一項に「天智天皇六年外冦防備の為に築かれたる山城の一なり」と明記されており、浦生の石塁は屋嶋城跡でした。しかし、最近まで県内を代表する古代山城と言えば、山上を取り囲む城壁が明確で、城門・水口・門礎石などの残存遺構が良好な城山城跡でした。昭和26年に国の史跡に指定され、書籍でも詳しく紹介されています。しかし、主要な遺構がゴルフ場内にあるため、容易に見学できない現状です。


浦生の石塁（城内の石碑）

昭和38年に発掘調査が行われた「おつぼ山神籠石」と、翌年の「石城山神籠石」は山城跡であると報告されました。山上を取り囲む列石遺構は、城壁の土塁の根石であることが判明したのです。文化財の指定名称に採用された神籠石は誤りであったわけです。この調査で、浦生の石塁を発見された関野先生などの「山城説」が確定しましたが、関野先生は既にこの世にいませんでした。

昭和55年の浦生の城跡調査の時点では、山上遺構は未確認で浦生の石塁が屋嶋城の唯一の遺構でした。そして、古代山城の谷を取り込む構築物は山上の城壁に繋げるのが標準の型であると解釈し、谷間に独立して築かれた不可思議な構築物と思う研究者もいました。詳細な遺構図が作成されましたが、石組では築城年代が実証できません。また、平安時代の土器を発掘したものの、飛鳥時代の遺物に出あっていませんでした。

この時の調査は屋嶋城跡の根拠を弱める結果となった様子で、疑問視する意見も多く

なりました。少なくとも考古学の視点では、「文献史学の屋嶋城は存在しても考古学での屋嶋城跡は存在しない」との複雑な状況になりました。

城跡を実証できる遺構や遺物が存在しないため、「肯定説・未完成説・否定説」などの諸説がありました。日本書紀に記述の、9文字の「讃吉國山田郡屋嶋城」は、何人も明確に説明のできない「幻の城」の状況でした。

城内側の石塁（上方に物見台）

物見台から西方の海路を望む

城跡調査の 4年後の昭和59年に、中世山城研究の権威、村田修三先生（元奈良女子大学教授～大阪大学大学院教授）が南嶺山上の北斜面の土塁遺構を発見されて学内誌に発表されています。しかし、この発見はごく少数の研究者が知るに止まってしまいました。

文化財の指定名称が平成7年に改正され、神籠石は削除され城跡が追加されました。近年の史跡名称は大廻小廻山城跡（岡山県）鞠智城跡（熊本県）永納山城跡（愛媛県）と命名されています。しかし、既に指定している「○○神籠石」の史跡名称を改める様子はありません。学術用語になりましたが、人々に意味不明の名称を継続することは文化庁の権威に係わる事柄であり、二重の誤りを犯すことになるのではと思われます。

3．浦生の石塁は遮断城である

昭和時代の後半から平成時代に発掘調査が多くなったことや、新たな山城の発見などによって古代山城の解明が急速に進みました。私が城門遺構の周辺の石塁を平成10年に発見します。このことが切っ掛けとなって北斜面の土塁遺構の調査や城門の発掘に繋がり、山上の屋嶋城の実在が確定しました。この学術調査は高松市・香川県・文化庁の大成果となりました。なぜならば、夢物語の屋嶋城が史実に変身したためです。急を要した築城にかかわらず適地の屋島の選定に加え、断崖を活用した省力工事や種々の工夫などが解明され、堅固な城が見えてきました。

未確定遺構の浦生の石塁の再調査が始まり、築城年代の土器が発掘されて、浦生の石塁も城跡遺構であることが確定しました。山上に城の遺構が認められなかった前回の調

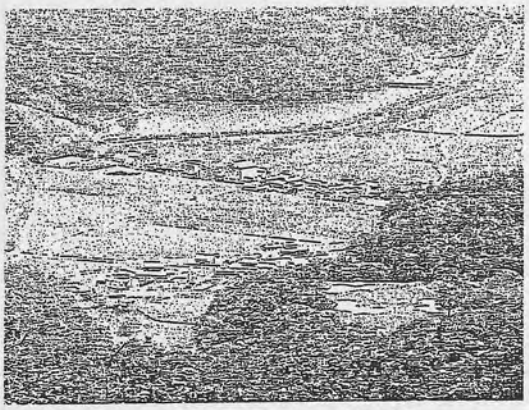
査時点では、山上の城との関連が読めませんでした。しかし、近年は国内と朝鮮半島の山城の調査と研究が進み、新たな事柄が判明しています。その中に敵軍の侵攻が予想される交通路や城への進入路に、遮断施設を築いた事例があります。

築城年代の明確な遮断施設は、後の時代の太宰府地域を守るために築かれたと思われる巨大で長い堤に堀を併設した「水城」に続いて、「浦生の石塁が２例目」となる稀少な遺構です。総社市の鬼ノ城の南東下方の水田の中にも水城状遺構があります。

容易に見学できる遺構は前記の３遺構だけです。浦生の石塁は誠に価値のある史跡に変身したのです。

太宰府の水城（右が博多側）

瀬戸内海の西方から屋島を見れば、山上に通じた大きい谷筋と、上陸に適した砂浜が広がる浦生の海岸が目に入ります。浦生の石塁は、この谷筋から山上の城を攻撃してくるだろうと想定した城外の遮断施設で、屋嶋城の第一次の防御施設だと思われます。物見台から西方の海路を眺めたのちに、石塁の周辺の地形を含めて詳細に観察すれば、意図して敵を迎え入れても良いと思われる堅固な遮断城が見えてきます。



鬼ノ城の山麓の水城状遺構

おわりに

屋島山上からは浦生の石塁は見えません。石塁のある場所は、浦生集落の鵜羽神社の南側の道を北嶺に向かって１㎞ほど直進します。道半ばで山道となり、谷筋を横切る堤状の石塁に出あいます。15分ほど歩いた標高 100ｍの地点で石碑と説明板があります。周辺は木々に覆われた静寂の地です。いちど浦生の城跡を訪れ、1300年前の飛鳥時代の空気が漂う空間を楽しんでいただければ幸いです。

・・・　　・・・

＊香川経済研究所・調査月報・2012年 3号の『讃岐の宝「屋嶋城」』から抜粋し、改変したものです。